

非定形 Ving 構文における動詞移動の歴史的発達:

非定形 Ving と副詞の語順に焦点を当てて

杉浦 克哉

1. 導入 本論文では英語の非定形 Ving 構文における動詞移動について論じる。具体的には、歴史コーパスを用いて英語史における非定形 Ving と副詞の語順を調査し、15 世紀中ごろから 18 世紀初期まで、独立分詞構文(1a)、現在分詞縮約関係節(1b)、前置詞補部 Ving 構文(1c)、自由付加詞構文(1d)では動詞移動が生産的だったと主張する。(1)では Ving に下線を引き、副詞を太字で示し、目的語を四角で囲んだ。

- (1) a. þe voice of our Lord smytand to-gidres **desert**,
the voice of our Lord smiting together desert,
'the voice of our Lodr smiting desert together' (CMEARLPS-M2,32.1325, M2)
- b. for it is þe Holy Gost werkyng plentyuowsly **hys grace** in 3owr sowle.
for it is the Holy Gost working plenteously his grace in your soule. (CMKEMPE-M4,41.890, M4)
'for it is the Holy Gost working his grace plenteously in your soule'
- c. And euery baxster in kepyng treuly **þe assyse aforseyd**, ... may wynne in euery quarter
And every baxster in keeping truly the assize aforesaid ... may win in every quarter
'And every baxter in keeping the assize truly aforesaid ... she may win in every quarter.'
(CMREYNES-M4,137.21, M4)
- d. is she therfore no begger, begging still **her bread**?
'is she therefore no begger, still begging her bread?' (GIFFORD-E2-H,B3V.206, E2)

動詞移動の歴史を調査した先行研究は定形節を扱うものが多く、非定形節の動詞移動を調査した先行研究は Nakagawa (2011), Tanaka (2019), 田中 (2021) などいくつかはあるものの十分に研究されているとは言い難い。とりわけ非定形 Ving、副詞、目的語の語順から動詞移動を調査した先行研究は筆者が知る限り存在しない。

2. 調査方法 本論文は、定形動詞と副詞の語順を調査した Haerberli and Ihsane (2016) の知見を非定形 Ving 構文に応用した。まず、Pollock (1989) 以降の生成文法の枠組みでは、副詞と否定辞は節構造の中で固定された位置を占め、動詞がこれらに先行する場合、動詞は VP の外へ移動すると仮定されている。この仮定に従い、(i) 副詞が非定形 Ving と 3 語以下の名詞目的語に先行する語順(以下 Adv-Ving-O 語順)と、(ii) 副詞が非定形 Ving と 3 語以下の名詞目的語の間に介在する語順(以下 Ving-Adv-O 語順)を調査した。調査からは代名詞目的語と 4 語以上の非代名詞目的語を除外した。

調査対象とする副詞は、動詞の様態や頻度を表すものに限定し、now などの時を表す副詞、then や thus などの談話標識の役割を果たす副詞は除外した。また、away や forth などは不変化詞と見なし除外した。これらの基準に基づき、Adv-Ving-O 語順を基底語順と仮定し、Ving-Adv-O 語順は動詞の左方移動により派生すると仮定する。また、調査は中英語、近代英語を対象とし古英語は除外した。これは、古英語の非定形 Ving 構文はラテン語の影響を強く受けており、英語本来語ではないとする分析が先行研究で主張されているためである。

調査に使用したコーパスは Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English, Second Edition (PPCME2), The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Early Modern English (PPCEME), The Penn-Parsed Corpus of Modern British English, Second Edition (PPCMBE2) である。(1)は PPCME2, PPCEME から得た例である。

3. 調査結果 調査結果は以下のとおりである。PPCME2, PPCEME, PPCMBE2 の時代区分を表 1 の下に示す。表 1 から、15 世紀中ごろから 18 世紀初期まで Ving-Adv-O 語順は生産的だったが、18 世紀以降衰退していることが分かる。

表 1: Adv-Ving-O 語順と Ving-Adv-O 語順の 50 万語当たりの頻度

	M1	M2	M3	M4	E1	E2	E3	L1	L2	L3
Adv-Ving-O	4.4	0	2.7	14	34.2	52.7	73.1	30	36.7	39.8
Ving-Adv-O	0	5.1	5.4	14	23.7	15.8	8.8	1.9	3.2	2.4

M1 (1150-1250), M2 (1250-1350), M3 (1350-1420), M4 (1420-1500), E1 (1500-1569), E2 (1570-1639), E3 (1640-1710), L1 (1700-1769), L2 (1770-1839), L3 (1840-1914)

そして表 2 は Adv-Ving-O 語順、Ving-Adv-O 語順の実例数の合計に占める Ving-Adv-O 語順の割合を表す。Ving-Adv-O 語順が占める割合は 14 世紀から 20 世紀前半まで基本的には減少している。

表 2: Ving-Adv-O 語順が占める割合

M3	M4	E1	E2	E3	L1	L2	L3
66.7%	50%	40.9%	23.1%	10.7%	5.9%	8.1%	5.7%

現代英語の非定形 Ving 構文でも Ving-Adv-O 語順は観察される。*British National Corpus* (BNC)からの例を(2)に示す。

- (2) The government was also committed to **reducing radically** the budget deficit by implementing cuts in social spending; (BNC, 1985-1994, Keesings Contemporary Archives. 6146 s-units.)

スペースの都合上、詳細な調査結果を省くが、Adv-Ving-O 語順の独立分詞構文、自由付加詞構文、of 以外の前置詞補部 Ving 構文は 12 世紀から現代英語まで観察され、Ving-Adv-O 語順のそれは 15 世紀中ごろから 18 世紀初期まで主に観察され、18 世紀以降は散発的に観察される。一方、Adv-Ving-O 語順の現在分詞縮約関係節、of の補部 Ving 構文は 16 世紀から現代英語まで観察され、Ving-Adv-O 語順のそれは 15 世紀前半から現代英語まで散発的に確認される。

4. 分析 4 節では非定形 Ving 構文の構造変化を Haerberli and Ihsane (2016)の枠組みで分析する。まず、非定形 Ving 構文のうち、独立分詞構文、自由付加詞構文、of 以外の前置詞補部 Ving 構文は母型述語を修飾するゆえ、副詞的である。一方、現在分詞縮約関係節、of の補部 Ving 構文は名詞を修飾するゆえ、形容詞的である。このため両者を区別する。

(3)は *The Parsed Corpus of Early English Correspondence* (PCEEC)から得た Ving-Adv-O 語順を示す独立分詞構文の例である。そして、(4)は PPCMBE2 から得た Ving-Adv-O 語順を示す of の補部 Ving 構文の例である。

- (3) The king of Swede **haveing lately** an embassador in Muscovye ..., the agents gave som private ill words of the king of Swede ... (BARRING,240.181.3149, 1628-1632)

- (4) These unusual clauses, inserted in the very first acknowledgement of their Prince, sufficiently shewed their intention of **limiting extremely** his authority. (HUME-1757-2,2,4.68)

Haerberli and Ihsane (2016)は、動詞移動のターゲットが動詞と Agree 関係に入る際、unvalued V 素性と EPP 素性が移動の引き金となること、また、unvalued V 素性と EPP 素性は主要部に存在すると仮定している。これに従い T は unvalued V 素性を、V は unvalued T 素性をそれぞれ担うと仮定する。T が EPP 素性を持つかどうかは随意的であると仮定する。

この枠組みのもとで独立分詞構文、自由付加詞構文、of 以外の前置詞補部 Ving 構文の統語構造は(5)、(6)で示される。Adv-Ving-O 語順の非定形 Ving 構文は、12 世紀から現代英語まで動詞が元位置にとどまる(5)の統語構造と考えられる。そして、Ving-Adv-O 語順の非定形 Ving 構文は 15 世紀中ごろから 18 世紀初期まで、動詞が T へ移動する(6b)の構造であると考えられる。18 世紀以降、Ving-Adv-O 語順を示す当該の非定形 Ving 構文は衰退するため、基本的には話者は(5)の構造のみを許す。しかしながら、現代英語でも(2)の of 以外の前置詞補部 Ving 構文のように Ving-Adv-O 語順が見られることから、(6b)の構造を許す話者が存在すると主張する。

- (5) [CP C [TP Subj [T T_[uV]] [vp adv [vp V-V_[uT]] [vp t_v O]]]] (Adv-Ving-O 語順)

- (6) a. [CP C_[uV] [TP Subj [T T_{[uV][EPP]}] [vp adv [vp V-V_{[uT][uC]}] [vp t_v O]]]]]

- b. [CP C_[uV] [TP Subj [T V-V_{[EPP][uE]}] [vp adv [vp t_{v-v} [vp t_v O]]]]] (Ving-Adv-O 語順) (cf. 田中 (2021: 58))

次に、現在分詞縮約関係節、of の補部 Ving 構文の統語構造は(7)、(8)で示される。Adv-Ving-O 語順の非定形 Ving 構文は、16 世紀から現代英語まで動詞が元位置にとどまる(7)の統語構造であると考えられる。そして、Ving-Adv-O 語順の非定形 Ving 構文は、15 世紀前半から現代英語まで動詞が Asp を経由して T へ移動する(8b)の統語構造であると考えられる。現代英語では Ving-Adv-O 語順を示す当該の非定形 Ving 構文は衰退しているため、基本的には話者は(7)の AspP 構造を持つ。しかしながら、現代英語でも(9)のような現在分詞縮約関係節の例において Ving-Adv-O 語順が見られるため、(8b)の TP 構造を許す話者が存在すると主張する。(9)は *Collins WordBanks Online* からの例である。

- (7) [AspP [Asp Asp_[uV]] [vp adv [vp V-V_[uAsp]] [vp t_v O]]]] (Adv-Ving-O 語順)

- (8) a. [TP [T T_{[uV][EPP]}] [AspP [Asp' adv [Asp' Asp_{[uV][EPP]}] [vp V-V_{[uAsp][uT]}] [vp t_v O]]]]]

- b. [TP [T V-V_{[EPP][uT]}] [AspP [Asp' adv [Asp' t_{v-v}] [vp t_{v-v} [vp t_v O]]]]] (Ving-Adv-O 語順)

- (9) the extent of the drug dealings **increasing dramatically** the prostitution was increasing dramatically ... (doc#9012)

5. 帰結 本論文の分析により、現代英語の現在分詞縮約関係節が TP であるか AspP であるかの問題が解決されると思われる。(cf. Tozawa (2014), Sugiura (2019)) 現代英語の縮約関係節は基本的には AspP であるが、TP の構造を許す話者も存在すると考えることで 2 つの構造が認められるからである。

主要参考文献: Haerberli, Eric and Tabera Ihsane (2016) "Revisiting the Loss of Verb Movement in the History of English," *NLLT* 34, 497-542./ Sugiura, Katsuya (2019) "A Generative Analysis of Reduced Relative Clauses in English," *JELS* 36, 288-294./ Tozawa, Takahiro (2014) "The Head Raising Analysis of Reduced Relative Clauses in English," *JELS* 31, 221-227./ 田中 智之 (2021) 「非定形節における動詞移動の歴史的発達」『名古屋大学人文学研究論集』第 4 号, 51-64.